

現代日本語における敬語の誤用について

八重樫 幸 孝

目次

序章	はじめに
第一章	敬語とは何か
第一節	敬語の分類
第二節	敬語の表し方
第三節	敬語の働き
第二章	敬語の誤用の分類
第一節	語形上の誤用
第二節	運用上の誤用
第三節	許容される誤用
第三章	研究結果
終章	おわりに
参考文献	

序章 はじめに

私は一年間のアミューズメント施設でのアルバイトを通して、敬語について興味を抱くようになった。小さな子供から大人まで、多くの人が出入りする職場で接客業をするにあたり、失礼の無い言葉遣いが必要だったからだ。

敬語を意識した生活を始めると、「この言葉は日本語として正しいのだろうか？」と思う言葉が身の回りに多くあることに気が付いた。自分が接客する時の言葉遣いを始め、自分が接客される時の相手の言葉遣いについても本当に正しいのか疑問を抱くようになった。そして、これが敬語の誤用について調べるきっかけとなった。

本研究では「現代日本語における敬語の誤用について」をテーマとして、敬語の表し方や誤用の型を分類し、考察していく。

第一章 敬語とは何か

第一節 敬語の分類

ここでは、文化審議会が発表した『敬語の指針』に従って敬語を分類した。この『敬語の指針』では、従来「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の三種類に分類されていた敬語が、「尊敬語」「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ」「丁寧語」「美化語」の五種類に分類されている。三種類から五種類になることによって敬語の仕組みが変化するというのではなく、適切な使い方をより深く理解するための分類であった。

第二節 敬語の表し方

敬語の表し方は、大きく三つの方式に分けることができる。

(一) 別語方式

通常表現・尊敬表現・謙譲表現で、別の言葉に置き替わる方式。置き替えられた言葉の意味は変わらないが、動作の表し方が異なる。通常表現では動作をそのまま表し、尊敬表現では動作を高めて表し、謙譲表現では動作を低めて表す。

例)「話す」の場合 … 通常表現＝「話す」尊敬表現＝「おっしゃる」謙譲表現＝「申す」

(二) 接語方式

通常表現・敬語表現・謙譲表現のそれぞれで、言葉の本体そのものは変わらないが、前後に動作を高めたり、動作を低める働きの語を接合したりすることによって、尊敬や謙譲の表現に切り替える方式。

動作を高める型の例 「お～になる」「お～くださる」「お～たまわる」「(お)～なさる」

動作を低める型の例 「お～する」「お～いたす」「お～できる」「お～いただく」

(三) 併用方式

別語でありながら接語の型をとりこんだ表現方式。

例)「召す」→「お召しになる」(「着る」の尊敬語)

→「お召し上がりになる」(「食べる」の尊敬語)

第三節 なぜ敬語を使うのか

『敬語の指針』には、敬語の重要性として以下の二点が挙げられている。

- ・相手や周囲の人と自分との間の関係を表現するものであり、社会生活の中で、人と人がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために不可欠な働きを持つ。
- ・相手や周囲の人、その場の状況についての、言葉を用いる人の気持ち(「敬い」「へりくだり」「改まった気持ち」など)を表現する言語表現として、重要な役割を果たす。

以上のことから、敬語は敬いの気持ちを表現する他に、使用者がその場の状況や人間関係をどのように捉えているかを相手、もしくは読み手に表現する手段であると言える。相手を敬い、人間関係をより良好なものにしようとする目的の他に、相手との心理的距離を適切に保つという目的のためにも使用されるのである。

第二章 敬語の誤用の分類

第一節 語形上の誤用

語形上の誤用とは、その語形が敬語として規範的ではない表現のことである。ここでは、「お使いになられる」「お召しになられる」のように二重敬語となってしまうものや、「さ付き言葉」「れ足す言葉」について分類し、考察した。

「お使いになられる」は接語方式での二重敬語、「お召しになられる」は併用方式での二重敬語である。前者は「お使いになる」に尊敬表現をつくる「れる」が付いており、後者は「お召しになる」に尊敬表現をつくる「れる」が付いている。より丁寧な言葉遣いにしたいという気持ちから敬語表現を重ねてしまっているように見えるが、現代の日本語において二重敬語は例外なく誤用とされている。

「さ付き言葉」「れ足す言葉」は、不要な「さ」や「れ」が付いているために誤用とみなされる。

第二節 運用上の誤用

運用上の誤用とは、語形は正しいが、発話に関わる人物間の社会的関係と整合しない表現のことである。ここで多く見られたのが、謙譲表現を相手側に用いてしまっているものだ。「お持ち帰ります」「お話ししてください」「ご賞味ください」などが挙げられるが、いずれにも本来謙譲表現として扱われるべき言葉が使われている。

また、人称として用いられる「ぼく」「人」「自分」など、改まった場や公式の場での使用を避けるべきものもあったので本節で取り上げた。

第三節 許容されると考えられる型

誤用と考えられているものの中には、広く用いられて許容されるようになったものや、見方によっては正用とすることができるものもある。そこで本節では、「ら抜き言葉」「親愛語」「確認形（よろしかったでしょうか 等）」について考察した。

「ら抜き言葉」について、尊敬や受身の表現と可能表現との区別をはっきり口説させるために登場したのが「ら抜き言葉」であるとするならば、これはむしろ言葉の進歩と言えるのではないかという考え方が多くなってきている。

「親愛語」は、〈公式の場以外で、弱い立場にある人に対して用いる〉という条件下において許容しようという考え方が生じた。「親愛語」として用いられる言葉は、謙譲語や丁寧語とは区別される。

「よろしかったでしょうか」のように一見過去形で聞いているのは、時相的に「現在完了」と捉えられる。日本語には現在完了を表す動詞が無いために過去形が使われているが、現在完了が〈過去の状態や動作が、現在の状態や動作とつながりを持つことを表す語法〉であるとするならば、「よろしかったでしょうか」は現在完了を表す言葉遣いだという考え方があった。過去形ではなく現在完了を表す確認形だとすると、相手を思いやった言葉遣いといえることができる。

第三章 研究結果

現代の日本語における敬語の誤用を調査した結果、非常に多くの誤用が現代の日本語に蔓延していることが分かった。その誤用の種類は様々で、語形上の誤用だけでなく、運用上の誤用も多くあった。その中には普段何気なく使っている言葉や許容されると考えられるものもあり、言葉の変化を感じた。

敬語の変化には語句レベルでの変化と敬語体系に関わる変化がある。少々の語形の変化や語句の使用度の変化はずっと続いていることであるが、それによって敬語体系そのものが変化するということはなかった。よって、第二章で挙げたような誤用や言葉の変化がこれから増えていったとしても、敬語の基本はこれからも変化しないということが予想できる。

「ら抜き言葉」や「確認形」については、賛否両論あるのが現状だ。「ら抜き言葉」は言葉の変化とみなす人が多くなってきているようであるが、「確認形」は「バイト敬語」の一つとして誤用扱いされがちである。一見すると誤りのように見えるが、詳しくみると、そこに他者の立場を思いやる日本人の心を見出せる言葉もある。

言葉は社会と共に変化していくものであり、その変化はこれからも続いていくはずである。しかし、その変化の中でも、他者を思いやる「心の言葉」を正しい形で表現していくことが大切なのではないかという考えに至った。

終章 おわりに

今回の調査を通し、誤って用いられている敬語が身の回りに氾濫していたことに驚いた。これまで敬語を使う際には自分なりの注意を払ってきたつもりでいたが、まだ敬語についての理解が浅く、間違った敬語を無意識に使っていたことに気が付いた。これから社会に出ると、今まで以上に様々な人を接する機会が多くなり、その都度場面や人間関係に適した敬語表現を使う必要が出てくるはずである。敬語は正しい形を正しい場面で用いることにより、相手と良好な関係を築く手助けをしてくれるものであるので、本研究で学んだことを活かし、正しい言葉遣いを身に付けていきたい。

参考文献

- 北原保雄「明鏡国語辞典」 大修館出版 2002
- 井上明美「知らずにまちがえている敬語」 祥伝社出版 2013
- 野口恵子「失礼な敬語」 光文社出版 2013
- 奥州信義「残念な日本語」 東京堂出版 2011
- 奥州信義「勘違い敬語の辞典」 毎日新聞社 2007